資料番号１

子育て支援センター全国セミナー２０１４　in　熊本

事業実施報告書

テーマ

「ともに創ろう！新しい時代の子育て支援センター」

―　私たちの持つ子育て支援の総合力をもっと活用しよう！―

日時：平成 26 年 8 月 28 日（木）～　29 日（金）
会場：ANA クラウンプラザホテル熊本ニュースカイ
熊本市中央区東阿弥陀寺町 2 番地　TEL　096-354-2111
参加者数：４６４人
（医療関係 12 名　行政・大学関係１５名　保育園・拠点事業者 437 名）
特別プレ企画　208 名　第 1 分科会　174 名　第 2 分科会　72 名
第 3 分科会　78 名　第 4 分科会　86 名

第１日

開会式

写真：来賓席

写真：主催者席

開会の挨拶
　熊本子育てネット会長
　榊田正治氏

主催者挨拶
日本子ども子育て支援センター
連絡協議会会長　新澤誠治氏

来賓御挨拶

熊本市副市長　牧慎一郎氏

写真：熊本市副市長牧慎一郎氏

写真：開会式会場　2

（２）基調提案（13:20~13:50）

『子育て支援の新しい幕開け』

新澤誠治氏（子育てひろば推進センター
みずべの会代表・東京都）
日本子ども･子育て支援センター連絡協議会会長

【要旨】　「1，57 ショック」から社会が関心を持ちだした。それから 20 数年経った。

子育て支援モデル事業が始まったその時に全国の保育所を見にいった。圧倒されたことを覚えている。子どものみならず、家族という背景の中で子どもの子育てをしているのだな、という事を思った。各地の実践から学んだ事がある。

保育という実践を母体として支援をされていることが分かった。他に、保護者、地域を巻き込んでいた。そして園長の志が伝わってきた。

千葉の実践グループの研修が一冊の本にまとめられた。その中を読む中で、保育園の持つ総合力という言葉があった。保育園の持つ総合力と可能性だと思う。

思いを形にするのが子育て支援だと思っている。保育の根っこを持ちながら、時代に対応していくという事ではないだろうか。

新しい幕開けが来たと思う。ひろば型が出てきて、支援事業になってきて。しかし、それは卓上プランではなかったか、という批判を聞いてきた。それについては遺憾な思いがしていたのは事実、しかし、同時に反省する事もあった。

今回の大会は意識改革を求めている。拠点事業というのは、意識が保育サービスという枠の中で目が内側を向いてしまう恐れがある。それを地域へと向かわせていく事が必要である。

向き合うのは子どもだが、その背後にいる親や家庭や、地域など様々な背景を意識する事だと思う。そして、保育園の持つ総合力を意識する事だと思う。そして、地域からの信頼はとても大きな財産だと思う。

育児不安などそういう不安感に向き合うというより、子どもの育ちを支える支援である必要がある。そのことを意識した上で、新しい時代に向き合わなければならないのではないだろうか。

最後に、誇りと希望を持って支援をしていきたいと思っている。子どもの育ちの負の部分に向き合っているのが現状ではないだろうか。これからも危機感を持ちながら切り開いていかなければならないと思う。

以前から付属の事業ではない、と思っていた。付帯事業ではない。本体そのものだと思っている。子どもの向こう側にある家族や地域に目を向けていく。そしてみんなで育てていく、そういう事ではないかと思う。

誇りと希望を持つとはそういう事だと思う。新しい時代を力強く踏み出して欲しい。

（文責：橘）

（３）行政説明(14:00~14:50)

『子育て支援拠点事業の新しい展開』

竹林悟史氏

（厚生労働省雇用均等・児童家庭局
総務課少子化対策企画室長）

（４）基調講演(15:00~16:10)

『思春期から見える子どもの育ち』

広木克行氏（神戸大学名誉教授）

【要旨】　まず佐世保での事件に触れながら話を進めていきたい、と思っています。

佐世保の市民の多くの人が正確な情報を頂いた。佐世保の市民の中では沢山の方が、不安に陥っているようだ。思春期を乗り越える事が出来るのかどうか、そういう心配をしながら子育てをしているようだ。

しかし、同時に報告されたのはあの事件は特殊な事件ではなかったのか、という声だった。不安が高まると、あれは特殊なケースであり、私達には関係ないと思いたい気持ちも分からない訳ではないと思う。昨夜はそういう課題を頂いた。

そしてもう一つは、なぜあれほど多くのサインが出ていたにも拘らず、何故見えなかったのだろうか、という問いかけである。それはとても重たい問いかけである。防げたのではないか、という問いかけはとても厳しいと思われる。

学校の先生からすれば、とにかく忙しすぎる現実は、自責の念に駆られる事もあるだろうし、逆に言えばそれは言い訳にしか過ぎないと見られる事も辛い話ではないだろうかと思った。沢山の矛盾を感じたことだった。

そして思う事は、10 年前のあの事件が終わっていない事が明らかになった思いがした。あの事件からどんな教訓を学んだのか、という学校を始めとする佐世保市民への問いかけには誰も応える事が出来な

かったのではないだろうか、というのが思いであった。
　今度こそ教訓を学べるような分析を行わなければならないと思っている。

　あの 2 つの事件から、幼少期の育ちの発達から問題や課題をどう捉えていくか、という事から学んでいきたい。

　子ども達からは沢山の SOS が発せられている。これは幼少期からたまりにたまっている「もつれ」を、どうやって「ほどいていく」のかが大切になってくるのではないか。それには子どもの声を聞いていく事ではないだろうか。
　子どもの問題行動は「もつれ」と捉えて、それを「ゆるめていこう」という捉え方でないと、対処の仕方を誤るのではないだろうか。厳しく接すれば、それで良くなるのだろうか。それはほどけたはずのもつれが、きつくしばった為にほどきにくくなってしまった、という事にならないだろうか。時間をかけて子どもの気持ちをほぐしていくことが大事ではないだろうか。そうすればゆるめられていくのではないだろうか。
　子どもは育ち直しの名人である。だから「ゆるめる」ということが大事になってくる。育ちの「ほつれ」と捉えていきたい。

　「愛情への飢え」「人間関係の苦しみ」「育たぬ自我」これは今の子ども達の苦しみを書かせてもらっています。例えば皆さんの目に、子どもの苦しい人間関係が見える訳ではない。それは「行動」に顕れて見えてくる。皆さんの目には、それは例えば暴力や暴言そしてパニック行動などで見えてくる。これを『行動化現象』と呼んでいる。ではないだろうか。その内側に「愛情への飢え」や「人間関係の苦しみ」であったり「育たぬ自我」があるように思えないだろうか。
　行動以外に何に現れるのでしょうか。それは身体に現れます。特に、今の子ども達は運動不足です。
　特に福島の子ども達が挙げられます。ホールや教室の中で遊ぶ、という身体的制約が強くならざるを得なくなっている。ある保育園の先生は土踏まずの出来ない子どもが増えてきた、という事が分かってきた。肥満傾向が強くなってきた。土踏まずが出来ないとは、それはつまり遊びこんでいない、と言われている。
　そのことは集中力の減退につながっていく。著しく集中力が落ちている。授業に集中出来ない子ども達は成績が下がらざるを得ない。
　それは落着きの無さ、という「多動」という形で現れてくる。そしてそれは、授業態度に表れてくる。全く集中できない子どもの姿だ。
　かしこい身体を育てなければ、賢い頭は育たない、ということだ。その子ども達に賢い子どもをといくら願ったところで、その身体は授業に集中出来ない土台ということだ。
　しかもそれは一般化してきている。例えばバギーに載せていると歩ける子どもも歩かなくなる。2 人いれば大変だ、という気持ちもよくわかるが、その事により何が犠牲になっているかは知るべきでないだろうかと思う。
　運動不足になり、賢い身体が育たなくなる、授業に集中できない身体になっていくということだ。今やそれは日本全体の問題と映る。

そして 3 つ目は症状化の現象であります。チックや顔面がひきつったり。最近では「うつ」が幼少化している。うつ傾向の子ども達が多くなっている。1 歳半の子どもが夜寝ない、という。どうしてか?と思ったら、スマホでアンパンマンをずーっと見せている。これを続ければ受動的遊びしかできなくなる。

赤ちゃんの頃から表情が乏しく、笑わない。スマホの刺激では笑うかもしれないが、人間があやす、という刺激をもとめない、笑わない、甘えようとしない。逆にべたべたと甘えてくる子ども達も増えてきている。

アレルギーも症状化の現れですね。

その背後にあるのは、愛情への飢えがある、と言いました。

愛情の飢えとは、親子の関係。一番大事な愛着の関係が岡田タカシ先生の本で「愛着障害」という本がある。従来愛着の問題は特殊な家庭の事情で育てられた子どもと理解されていたが、これは今や一般化して、大人にも見られる問題と言われるようになってきた。

昨今では「発達障害」の問題が言われるようになってきたが、その背景には実はかなりの割合で「愛着問題」が大きく関わっているようだ。しかもこれが「発達障害」と受け止められているケースもあるようだ。

山口総先生の本で「子どもの脳は肌にある」というのがある。こどもにとってスキンシップ、愛着形成がいかに大事かが書いてある。この本の中に落着きが無い小学 1 年生。発達障害か、と言われていた。お母さんと丁寧に話す中で、専門家に見せることになっていった。専門家の診断では「ADHD」かもしれない、と言われた。そこでもう一度母親の話を聞いていくと、その内一度も添い寝をした事が無いという事がわかった。乳離れが悪くなるなどを聞いたからだった。先生は「愛着障害」を疑って、それからスキンシップを図って、周りの先生たちと協力してやっていった。すると日に日に症状は改善されて行った。もし発達障害であるならば、1 年間で多動が落ち着くはずはない。

他にも行動に表れない子どもがいる。行動に表れないで、ものすごくいい子。甘える事をしない子どもがいる。ここでは「脅迫的な良い子」と書きました。

家ではよい子だが、そとでは何をするか分からない、という子がいる。実は、10 年前に佐世保で事件を起こした子どもがそうであった。家ではとてもお利口さんで、進んで勉強をして、何でも率先してやっていた。そういう子は危ない子。

親の手を煩わせる子を見ると、「お母さん、そういう子は自立上手だよ」と言っている。そういう子は安心するが、親の手を煩わせない子に会うと我々は心配する。スキンシップこれはとても大事、それをしながら出来た時は目を合せながら話をする。身体の触れ合いと心の触れ合いがあれば、愛着関係は成立していく。それがあると子どもはとても安心して過ごしている。そういう風な事が無いと、親に見捨てられる不安があるのではないだろうか。

例えば子育て支援センターで育児の話をする。一般的な話で言われるならば聞きやすいが、個別的話で言われるならば親はとてもきつくなる。なるべく多くの話を沢山の親には聞いて欲しいと思っています。

次は人間関係の苦しみです。愛着関係をタテの関係とすれば、友達の関係はヨコの関係です。友達を怖がる子供が増えだしてきた。それは小学校に上がれば出てくるが、今大学では人と話せない学生がどんどん増えてきている。

遊ばないで勉強ばかりしていたこども達が、大学に入って友達と遊べない、話せないという大学生になってしまって、それがどんどん増えている。今は「ボッチ食事」が増えてきている。人と話したくないから食堂のカウンターを一人づつ区切ってある。いつ誰に話しかけられるか分からないから怖い、という若者が増えてきている。どこで増えてきているかと言うと、京都大学での写真の記事がここにあります。同じ学生と話したくないから、大学に行きたくない、という不登校の大学生が今増えてきている。

子ども達に賢く賢くと遊ぶ時間を削ってまで、勉強をさせていたけれども、しかし子どもは学力だけで育つ訳ではない、子どもは豊かな人間関係を通して、人格が育つということを忘れてはならない。

大学にたどりついてから、不登校になる若者が 6 万人いると言われている。人間関係で苦しむ若者が増えてきていることを知るべきだ。

幼い時友達と一緒に遊ぶ。ぶつかった時にモノの取り合いになってびゃーと泣く。それが如何に大事な経験であるか。その横の繋がりの中で、知らずの内に我慢することをおぼえていく。やがて順番を待つという、社会性の芽が出てくる。

遊びあうからこそ、人格の形成が出来てくるのであって、遊ばない子ども、遊べない環境は心配しなければならない。

こういう小学 5 年生が相談に来た。聞けば「学校が怖い。授業ではなく、休み時間が怖い」という小学生がいた。授業中は先生の方向をみんな見ているから安心できるが、休み時間はみんなと話さなければならなくなる。それがいやだ（怖い)。

今や人間関係を十分経験しないままで大きくなってしまった学生が多くなってきてしまっている。人間関係が築けないと企業は雇いたくない、という傾向が当然ある。外国の学生は雇うけど、日本の学生は雇わなくなってきているという。パナソニックが 2010 年で 1200 人の採用の内、外国人枠は 750 人。次の年は 1390 人採用の内、外国人枠は 1030 人。残りの枠は日本人だけとは限りません。つまり日本への留学生もこの中に入ります、との事でした。

人間関係が築けない日本人の若者が今、どんどん増えている。これは幼少期にどれだけ、（横関係の）子ども達と一緒に遊んだか、が問われている、と思わなければならない。6 歳までのこの幼児期にしっかり遊びこんでいない、横の連携がなされていない子どもがいかに多いか。一緒に遊ばないまま乳幼児期を過ごした子ども達がどれだけ多いか。

幼少期は遊びを仕事にしている様な時期です。それを「能力に偏った子どもへの関心」が広がる事で、子ども達の遊びを奪うケースが出ていないか。その影響は大きくなっていく。「習い事と情報の洪水」と書きましたが、けんかするのもよし、そんな子ども時代を過ごす事がどれだけ大事か。子育て支援や幼稚園・保育園がどう子どもの遊びを保証してやるかが、思春期になった時に大きな背景になっていく事を私は思い知らされています。

先日、育児講演会を行った時に最後に質問があった。

「子どもが塾に行きません。どうしたらいいでしょうか？」「子どもは何歳ですか」「子どもは 1 歳半です。」「習い事は何ですか？」「塾は英会話です」。そういう時代になってきている。1 歳半では遅すぎる、というフレーズがある。8 ヶ月で英会話に通わせているケースもあるらしい。自分も塾で育った世代です。分からない訳ではない。

だから、子どもの育ちには法則がある、順番があるということを伝えた。子どもの育ちを無視して、良かれと思ってあれこれ習わせると、子どもの心に大変なストレスを生む事になる。それによって、思春期になった時に思いがけない問題に遭遇する事もある。子どもの育ちをしっかり踏まえて欲しい、と伝えた。

友達と遊ぶ、その値打ちが分からなくなってきている。そういう時代になってきている。

こどもの育ちの順番を学んで欲しい。かしこい身体を育て、すてきな心を育てていく事が大事。スキンシップを大事にして、心を育てる。

まずは身体を育てる事が大事。それから心を育て、賢い頭にしていく。育ちの順番はだいじであります。

育たぬ自我、とは自己との関係。しかし、自分というのは全てを捉えきる事は出来ない。しかし、それでも僕はこれが好き、ということは分かるはずだ。

しかし、これが分からなくなるという子どももいる。それは指示待ち人間になってきているという事である。許可待ち人間とも言える。年長や小学生になると結構いる。お利口さんが。枠をはみ出す事が出来ないお利口さンは、ストレスを抱える事が多い。

何かしたい事は無い?と聞いても「別に」という。それは心の中に沢山の苦しみを抱えて生きている子どもである。自我が育たぬが故に、自己決定の出来ない子どもになっているということである。

これがしたい、あれがしたい、という子どもがいると、ほっとする。したいということを叶えられるように、一緒になって考えていけばもっとしたい子どもになっていく。

しかし、したくても出来ない時がある。その時に自己が鍛えられるのである。出来ない現実と自分の思いがぶつかり合う中で、我慢をおぼえなければならない。そして先々を考えながら、どうやれば実現出来るかを思い描くようになるだろう。

自己を鍛えていけば、自我に苦しまない自分が出来あがっていく。

今の親世代は、子育ての予習が欠如した状態で、子育てに入いらなければならなくなっている、という点。

そして母性や育児は本能ではない、ということを頭に入れておかなければならない。母性や本能は、様々な人のやり方を見ながら、参加しながら身につけていくものである。決して内から湧き上がってくる様なものではない、ということ。

子育てに携わる、そして子育て支援をする我々にとってはこの 2 点を押さえておかなけらばならないだろう。

以前は兄弟で子守りをしなければならなかった。そこで予習が出来ていたから自分が親になっても出

来ていった。しかし、今は違う。予習なしで子育てに向き合う女性が少なくない。結婚するまで赤ちゃんを触った事が無い、という事も珍しくない。自分が親になった時には、不安の中で子育てをしなければならなくなるだろう。

今は子育て支援センターや保育園が無ければ、子育てが出来ないだろう。母になる、という事を身につけていく為には、誰かが伝えていかなければならないだろう。今思春期で起きているさまざな事件は乳幼児期を探らなければならない。

それほど乳幼児期は大事なのだ。それが皆さんの仕事なのだ。

今、思春期で起きている事件の背景には幼少期の問題が大きく関わっている事が分かってくる。あなたたちの仕事が、いかに大事な仕事であるか、幼少期が如何に大事なことであるかを理解しなければならない。（文責：橘）

（５）特別講演（16:20~17:40）

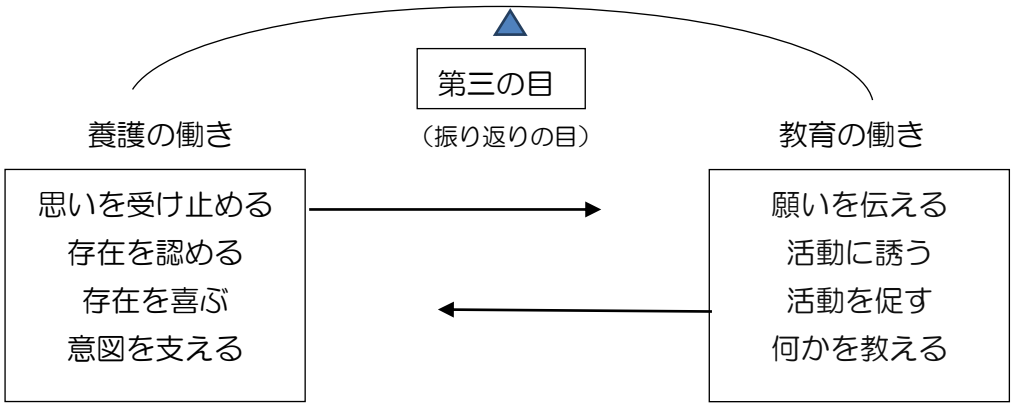
『育てられる者から育てる者へ』

鯨岡峻氏（京都大学名誉教授・中京大学教授）

・子育ては、今目の前の子どもを育てているだけでなく、その子が２０年後３０年後に更に子育てをする時にしっかり子どもを育てられる親になれるよう丁寧に見ていくことが必要。
また、自分の子育てを通じて自分の子どもの頃を思い出し重ねることで同一化している。
子育てを通じて今までの自分を引きずり出されてしまうが、その親子関係が必ずしも幸せな親子関係とは限らない。時には、憎しみや怒りがこみ上げてくる時もある。それを親は、いちいち消化して吸収してかなければいけない。
育てられる者から育てる者になる時、親が子育てに悩みなかなか育てる者になることができないのも理解できる。この転回の困難を支援するのが本来の子育て支援。保護者の辛い思いを受け止め自己肯定感が立ち上がるような子育て支援を。

自己肯定感・・・周りが自分を肯定してくれるから私は私を肯定できる！
“あなたが大事”周りの大人が子どもに思いを伝えることで、自己肯定感、信頼感が伝わる。行為に意味があるのではなく、その裏にある思いや心に意味がある。

・育てる営みには、二面の働きがある。 ⟶ 養護の働き・教育の働き



子どもの身になって見る　　大人の立場を踏まえる
（子どもの目）　　（大人の目）

養護の働き･･･子どもを大事に思う、子どもの思いを受け止める、子どもの存在を認める、子どもの存在を喜ぶ、子どもを愛するという周りの大人の心

教育の働き･･･大人は、未来の大人である子どもに対し、いま大人である自分たちがしていることをすることができるよう、さまざまなことに誘い、促し、教え、禁止や制止を示し、時には叱るという働きかけ

☆家庭や保育園、幼稚園、学校と現代は、「養護の働き」が弱くなっている。色んな力をつけようとする大人の一方通行の「教育の働き」が強く、このヤジロベエのバランスが崩れていることが分かる。だからこそ、家庭の子育てや保育園、幼稚園、学校の教育がうまくいっていない。そのことを考えれば、この「養護の働き」こそ、子どもの心の育ちに欠かせないものであることが分かる。

（文責　小岱紫明）

（１）特別プレ企画・事例研究とパネルトーク　(9:00~11:30)　参加申込人数２０８名

『医科・歯科・大学等の専門職の子育て支援における役割と支援センターとの連携』

パネラー
小野大地氏（歯科医）子ども広場「くっくえん」（小野デンタルクリニック併設）西宮市
小林ゆかり氏（歯科医）（小林歯科医院勤務）　水戸市
松添直隆氏（熊本県立大学環境共生学部教授・熊本市）　大学と地域をつなぐ活動
小西治子（尚絅大学生活科学部栄養科学科准教授・熊本市）　学生が体験する活動
岩丸明恵（コラボラキャンパス運営委員・北九州市）　大学を地域に開放する活動

コーディネーター
目良誠氏（一社　食育口腔育成支援センター理事長・兵庫県西宮市）

写真：特別プレ企画パネラー

写真：特別プレ企画会場

村上「多くの専門機関と連携をとって専門性を持ったオールジャパンでの子育て支援を切り開いていきたい」

目良「子どもの変化が出てきている中で、これを変えるのは保育だと思う。0～6 歳に対する保育が大事。

専門家の意見はあくまでも下支えでしかない。それを現場のプロである先生達が主体性をもってやっていかなければならないと思う。具体的な話をしたい。明日からこうやろうよ、というはなしをしたい。情感的側面よりも科学的側面はこれから重要になってくると思う。専門的レベルになると、如何にそういう方々を現場に巻き込んで行くか、これは大事になると思う。」
松添「大学の地域連携の活動を紹介したい。食育を推進している CDP プログラムがある。これは専門職業人の学び直し、学び足しをしている。文科省は「地（知）の拠点整備事業」を展開している。その中で地域と連係を取りながら、暮らしと子どもの発達を視野に入れた総合的な食育プログラムを 3 年間展開していった。例えば「保育園における食とは？」ということもやった。食はその人の履歴書だ。その人のバックグランドを為すものである事が確認出来たりした。大学での講演会などもやったりした。
　アンケート調査の結果を見ると、多様化する生活習慣が確認できた。保育に関する興味は人間力の基礎作りに集中し、食育と答えたのは 3%未満という結果だった。栄養士・調理師が園児の家庭での状況を把握しているかと言うと、10%前後だった。非常に遠い存在である事が問題ではないかと映った。
　現代の保護者の情報源はメディアが中心。確かな情報源が必要ではないかと感じた。」
目良「松添先生はなすびの権威である。いかに美味しく育てるか、というのが先生の研究。これは子育てに十分通じる。農学部だからとか、では関係なくこういう問題を考えるのに、先生の話をもっと聞くべきだと思う。」
小西治子「管理栄養士の養成を大学でしている。行政では保育を担当していた事もある。子どものうちから野菜に親しんで行くという事は大事な事だと認識をしている。私は「大学の食育活動を通して管理栄養士の立場を考える」ている。
　例えば大災害の時等を考えると、ある食材で何が出来るのだろうか、という事を考える。食は生きる上の基本である。そこにあるもの（郷土の食材を使う）を臨機応変に考える、ということが手腕になると思う。熊本の食育プランも目的をもってやっていく。これからの展開は、自ら家庭へ地域へと、セルフプロポーションが大事ではないか。」
目良「チームで取り組むべきだと思います。」
村上「大学をこじあけた、というのが次の岩丸明江さんです。」
岩丸「プレゼンター事業を北九州大学でやっている、と言えば先生と間違われる。しかし、そうではない、ファシリテーターというのが私の立場。私達が大学と協力してやっている事業について説明します。
　子育てほっとステーションをやっていたら、保育所（跡地利用）を貸して下さり、更に年間 40 万円の予算まで付けてくれた。8 つくらいシナリオを作って、事業の継続を考えた。その中で、北九州市立大学の地域貢献を見つけたので、その事を基に企画して頼んでみたら、試行という形で始まった。のちにキャンパスネットワークで 6 団体が協働して、他世代、地域連携等を目的とする。協定書は毎年発行して、みんなで意見交換をしてメーリングリストを活用して確認している。中間支援センターを目指している団体もあり、沢山の政策提言をしている。支援される事を待っている親が増えてきた、ということが考えられている。主体的に活動が獲得できるように、親や子どもを支える活動を支援している。会員制のプレイセンターでは、どうやったら子どもが遊びこめるか、ということを親が観察する場所である。これが増えればいいのにと思う事がある。多世代だから出来る事がある。食育であったり、パソコン教室であったり。
　この活動のミソは、協定書は大事、各団体が自立した団体である事、資金提供は基本的に大学に頼ら

ない、があると思う。
　スケールメリットは大学を使う、という事は信頼性に繋がるのは事実だった。」
目良「子育てをオール日本でやっていく。そして、子育て支援センター・保育士がアプローチしていくことが大事」
松添「大学のメリットを考える。物事は循環しているから、学生は直ぐに子どもを授かる立場になっていく。子育てを考えるのは大事だと思う。そして客観的な視点は必要。科学的に研究し一般化してく事が大事。」
目良「岩丸さんから見て、大学に対する要望はあるか」
岩丸「基本的に学生でも企画書・様相書を提出しているから、何でも出来そうな気がしている。
　例えば、横浜では学生も託児所で託児者をしているらしい。ビーノビーノ（ファミサポ会員）でやっている。それは出来るのではないか、と考えたら企画を考えて、企画書を立てている。実際、7 割の親が子どもを触った事がない、とう調査結果があるらしい。それを考えればやる価値はあると思う。」

第 2 部　～歯科医師の立場から
目良「親の相談は、食事に関する事が多いと言っている。日本で初めて、支援センターを支援するくっくえん　の報告です。」
小野「歯科医師園併設型　子ども広場　苦楽園くっくえん」「兵庫県の西宮で歯科園をしている。口から食べて、身体を育てているので、口腔育成の立場からそういう事を支えていこうと考えている。メディアの情報と、この子にあった現状とは乖離している事がある。この子にあった情報を提供している。
食育指導士、保育士もスタッフでいる。口だけではなく、全身の健康も見ている。
　幼稚園保育園によく講話に行き、口腔を通じて身体の成長を支えていく、という事を伝えている。成長の中心は頭部、特に口腔は重要である、と伝えている。
　乳児からの食育。ホルモン（睡眠）、刺激（負荷・・・温かい、冷たい、固い、柔らかい、食感）、栄養（食べ物）。歯科と食事をつなげて育てていく。
　一つの分野で」子どもの問題を解決していくというのは無理がある。見つけられるけど、どうやって解決していくのかが分からないというのが現実ではないか。それぞれの専門分野（医療関係。保育関係）が協力し合って解決に結び付けられればいいのではないか。
　病院の併設型は多いが、食事はお母さん方はとても興味がある。口腔の専門家としての役割があるのではないか、と思っている。
　子育て広場の登録をして、各地各団体を支援している。その他にもイベントをしている。ベロタッチ（様々な活性を促す、口腔内の成長）、ベビーマッサージなど。他にも地域の方々がスタッフとして様々な企画をし参加してきている。
　口腔内を見ればある程度、体の状態、発育が見えてくる。負荷が足りない、あごの骨は力を加える事で構造が出来てきている。負荷を得る為のものは、遊ぶ、噛む、食べるという意欲をもってしている子どもが少なくなってきたのではないだろうか、とみている。
　子どもは環境次第で、簡単に変わるな、という印象を持っている。環境に影響されやすい存在である、というのが子どもである事が分かった。
　医療者・保育者が理念をもって子どもに接するということが大事になってくる、ということが理解さ

れる。
　かみ合わせが深いか、正常であるかどうかで運動能力に差が出てくることがわかってくる。」これからの課題として、一人一人の成長をみていける医療であり、保育であり、教育である。
小林「歯医者が出来る子育て支援～。　歯科医師としてのターニングポイントがあった。矯正科に在局していた。指しゃぶり等様々な相談を受けた。子どもを授かった。震災被害にあって、両親の病院が消えた。様々な事があった。我が子の誕生は大きかった。不安だったが、今しかできない事（子育て）がベストの選択、と示唆を受けた事は大きかった。我が子が指しゃぶりをして、指を三本入れている状況を見てどこまで見守ればいいのだろうかと不安になった。指サックを作る事は指しゃぶりの治療だった。以前はそうだった。それでよかったのだろうか、という事を思い返していた。
　子育てで口腔領域に関わる時間は多い。例えば、心を育む哺乳の時間など親子の大事な時間になってくる。
　現代の問題点は噛めない子が増えている。口腔の発達には期限がある、ということを知る必要がある。咀嚼機能（離乳）は 18 カ月まで。それ以降は嚥下動きが変わってくる、飲み込む能力が獲得できないという事を知るべきである。
　ストローはとても難しい手段。コップが飲めるようになり、最後にマグ（ストロー）となる。ステップが変わってくる。獲得の順番が変わってくるという事。口腔の様子が変わることがあるかもしれない、ということ。
色々な所で診療したが、寄り添う力の大切さ、口は心をつくることを知った。」
目良「口腔は成長の履歴書。口元を見れば、大体当てられる。食がきちんといけば発達状況 OK。6 歳を支える我々は大体解決出来ることがある。ノウハウはあらかた出来ている。子ども達に何が出来るのか、早くやろうよ、ということを続けていきたい。」
村上「身近な先生にどういう風に声をかければいいのか。敷居が高い感じがする。アプローチを知りたいのだが」
小野「病気（虫歯）に対する治療が一番の関心事。身体の発達に関する歯科、というものは出遅れている、と感じている。むしろ、保育教育からアプローチをかけていったほうがいいのではないだろうか。歯科も今何をしてよいのかわからない面もある。もっといろいろと教えて下さいよ、という動きがあればまた変わってくるのではないだろうか」
小林「個人的レベルで動く歯科医師を探すのは難しいが、組織（医師会等）に声をかけて頂ければ、仕事として動く人も増えると思う。個人的に動くと嫌われるが、しかし個人的思いを太くしようという様々な人へのアプローチがあるという事実は心強い、と思う。私も示唆を受けた。」
目良「専門家がいかに子育てに関われるのかがわかればそれでいいのではないでしょうか。これからの皆さんの活躍を期待しています。」（文責:）稲葉）

第2日　分科会　「新しい支援を支える４つの意識改革」(9:00~12:00)

第１分科会　意識改革①新しい時代の支援の枠組み　参加申込人数１７４名

『 ともに語ろう！あたらしい時代の子育て支援センター 』

―　それぞれの枠を越えて想いを共有する　―

パネラー　新澤拓治氏（社会福祉法人雲柱社　施設長・東京都）、
海老敬子（松戸市役所子ども部審議監・千葉県）
橋本真紀（関西学院大学教育学部教授・兵庫県）
柳渓暁秀（中加積保育園園長・富山県）
甲斐恵美（風の谷保育園主任保育士・千葉県）
助言者　新澤誠治氏（子育てひろば推進センター　みずべの会代表・東京都）
コーディネーター　小岱紫明氏（敬愛保育園園長・熊本県玉名市）

Ⅰ目的

来年度から実施される子ども・子育て支援新制度においては、保育園では努力義務ですが、認定こども園では、子育て支援は本来業務となり義務化される。さらには、利用者支援事業も本格的に始まる。この分科会では、保育園、子育て広場、行政等それぞれの枠を越えて、新しい時代の子育て支援センターについての想いを語り、子育て支援の理念を共有することを目的とする。

コーディネーター　小岱紫明　　（熊本　敬愛保育園　園長）

Ⅱ各パネリスト発言要旨

パネリスト１　甲斐恵美　　（千葉県市川市　風の谷保育園主任保育士・子育て支援センター）

テーマ『　保育園ならではの子育て支援センター　』―　保育園の機能を活かした子育て支援１―

・保育園には、０歳から６歳までの子どもが生活している。保育園ではごく普通の風景だが、お母さん達には、大きな子育て支援となる。母親は今が一生懸命だから子ども育ちの見込みが見えない。保育園にはいろんな年齢がいるので、今までの自分の子どもの成長、これからの先の成長の見込みを見つけることができる。保育士がその気づきの手助けをする。

・保育園には、保育士、栄養士、看護師等の子育ての専門家がいるので、母親はいろんなことが相談でき、話すだけでも安心する。

・保育園には、園庭があり、子どもたちの子どもの文化伝統があり、母親だけでなく子どもも子どもから学んでいく。

・保育園の持つ子育て支援の総合力をもっと士ってほしい。

パネリスト　２　柳渓暁秀　　保育園代表（富山県滑川市　中加積保育園園長）

テーマ『　マイ保育園の取り組み　』　　―保育園の機能を活かした子育て支援２―

病気になったらかかりつけのお医者さんがいると安心できるように、子どもを授かったら、登録園をかかりつけのマイ保育園として、様々な支援が受けられるよう、保育園を活用しやすい場として地域に提供していく。活動内容としては、妊婦さんが出産する前から、保育園とつながり、産婦人科医と連携

してプレパパプレママ体験などを行い、出産後も保育園とつながり子育てを支援していく。
　富山県は人口１０６万人保育所数が公私立２９６園あり、現在、マイ保育園を実施しているのが１８１園である。全県下的に行政と保育園、産婦人科医などが連携して取り組み、保育園の特性と連携を活かした子育て支援が実践されている。今後さらに広がっていくことが望まれる。

パネリスト　３　新澤拓治　　子育て広場代表（東京都・社会福祉法人雲柱社施設長）
　テーマ　『　保育園･広場・諸機関との連携　』　―それぞれの特性を活かしあう子育て支援―
　要保護児童などの会議で、結論として、まず保育園に入れようというケースが殆どである。実際に保育園に入ると、子どもが心身ともに良くなっていく。子どもの発達を支えるということにおいては、保育園の持つ力は非常に大きい存在である。保育園があるからこそ子育て広場も子育て支援ができている。
　地域において、NPO が盛んな地域や、それぞれ地域に特性があり、どういう支援が必要なのか、地域の実情に合ったオーダーメイドの子育て支援が求められている。積み重ねていくことにより信頼感が生まれてくる。利用者支援も、メニューをただ紹介するのではなく繋がっていくことが大事。
　虐待の連鎖とよくいわれるが、それが起きなかった人もいる。それは広場での人との出会いが分岐点になっている。担当者が、そういう人たちと出会い、支援ができたらいい。来ない人ばかりに目を向けるよりも、今、来ている人に必要な支援を。
　後で事件を知ったりして「あの親子には何かしてあげられたのではないか・・・」と後悔することもある。広場に来ていても通過してしまう親子もいるが、一人でも子どもの虐待を減らしたいという思いが、人と出会うことへの大きなエネルギーになっている。

パネリスト　４　海老敬子　　行政代表（千葉県松戸市子ども部審議監）
テーマ『 子ども･子育て支援新制度における「総合的な子育て支援」』
　　―地域子育て支援を総合的にコーディネートする―
松戸市は人口４８万人で、子育て広場が１５ヶ所、支援センターが４ヶ所あり、研修を受けた４８人の子育てコーディネーターがそれぞれに配置されている。広場などで気軽に相談できて、心理的にハードルが低くなり行政の窓口がより広がり、子育ての社会的資源との関係が繋がりやすくなった。子ども子育て支援事業は、各自治体が主体となり地域の人に必要なサービスを届けていくというのが願い。色んなメニューがあっても、届かなかったら意味がない．松戸市では、行政の窓口よりも、より身近な、支援センターや子育て広場に、子育てコーディネーターを配置したことにより、学校，保険所、幼稚園等からの認知度が高くなり、地域の資源とつながりやすくなった。子育てコーディネーターが心がけていることは、①追わない、　②探さない、　③つなぐ、である。
　支援センターは地域資源の中核であり、熱心に取り組んでいる人が多いのですが、行政に伝えてこられることが少ない感じがします。今やっていることを整理し、必要なことをもっと行政に伝えてほしい。行政も気付かないことがあります。ぜひ、うまく行政を利用して連携をとってほしい。

Ⅲ　発言を通して明確になった子育て支援拠点事業の課題
助言者１　橋本真紀　（関西学院大学教育学部教授）
　地域子育て支援拠点事業を実施するにおいて四つのポイント。

１．　場作り

その場をどこに作るか？　その場をどう構成するか？地域で親子が集まりやすい場所はどこか？最初から保育園と決めつけない。地域によって違う。子どもの遊びを中心とすると、子どもを遊ばせたい人が来る。必ずしもすべての親が子どもを好きとは限らない。ほかの支援センターや子育て広場なども知っておく。

２．　連携

来ない人をどうするか？という意見があるが、この議論はやめたほうがいい。

まず、来る人をあたたかく丁寧に迎えること。どのような人を支援するのか、ターゲットを明確にすること。保育士には家庭に出向いて支援する権限が与えられていないので限度があるので、保健師と連携すること。それによって支援の内容が深まり、人と人が繋がっていく。

３．　親子も地域を構成する人たち

親子も地域のインフォーマルな資源であり子育て支援を担う人でもある。今や専門機関だけで対処できる状況ではない。地域の人々の参画がないとやっていけない。子どもの周りに多様な人々が集まることにより、子どもも社会性を学んでいく。

４．　地域性を捉える（俯瞰する）

保育園から地域がどう見えているのかではなく、地域から保育園を見てみることで、どう捉えていくかを見ることができる。

助言者２　新澤誠治　　(子育てひろば　みずべの会代表)

保育園は子育て支援の総合力を持ったところであり、最前線であり、定点観測地でもある。保育士は専門性から脱却してほしい。専門職の仮面を被っている以上、本音、悩みを出してもらえないもの。保育士も保護者も生きることの同伴者である。お母さん(利用者)の力をもっと信じて、智恵や力を借りるべき。

Ⅳ新しい方策や具体的なプラン

・産婦人科医、小児科医等と連携をとり、出産前から支援できる体制を作っていく。
・保育園に併設している支援センターだからこそできる支援をもっと活用する。保育園の園児と一緒に散歩に出かけたり、園児の活動の様子を実際に見られる機会を増やす。
・現場で実施していることや、必要だと思われること、行政が気づかないことなどを整理し、きちんと行政に伝えていく。
・地域の子育てをコーディネートできる人を育てる。
・母親(利用者)に企画してもらうプログラムを増やして参加型にしていく。
・一人ひとりの母親、子どもとときちんと繋がっているかを意識しながら、関わっていく。

Ⅴ子育て支援拠点事業展開のためのキーワード

１　地域性を捉える(俯瞰する)
２　地域の人材発掘

３　来ない人より来る人を
４　親子も大事な地域を支える人たち
５　出会うことへのエネルギー
６　出会いが分岐点
７　積み重ねていくことからの信頼感
８　専門性からの脱却
９　子育て支援センターは地域の中核
１０いい子育て支援があっても届かないと意味がない
１１マクロ(行政･制度)・メゾ(地域)･ミクロ(親子)が連携する

Ⅵ子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての助言者からの提言

１地域を基盤とした子育て支援拠点事業
　拠点事業の専門性とは、地域を基盤とすることである。私たちは万能ではないので、利用者の人、専門性を持った人、研究者の人、地域の人々から力を借りて連携していくことが必要である。地域を俯瞰し、地域から子育て支援センターを捉えてみることで、地域性を捉えることができるし、地域の実情に応じた支援ができる。利用する人が地域の中で繋がり、地域の中で生きていく、子どもを地域に繋げていく。親子が地域の中で生きていくことを支えていく。保育園は子育て支援の総合力を持っている地域の大きな社会的資産である。その力を活用し、色んな機関と連携して、拠点事業を発展させてほしい。

２来ない人を追い求めないで、今来ている人に。
　虐待や多くの事件の中で、その親子が孤立し、地域に出向いていなかったかというとそうではない。そういう人も広場を利用していた人がいる。ただ広場を通過しているだけの人もいるということ。もっと、来ている人に対して目を向け、傍らに立ち、寄り添っていくことが必要。専門性は大事だが、そこだけに捉われずに、私たちも本音で話し相手と向き合う。

３親の主体性を大事に
　親は子育てをしていると、ちょっと前に経験したことよりも、今のことに一生懸命になる。しかし、広場に来ることで、自分が経験した子育てを振り返ることができる。そこで担当者は意図的に母親が自ら子育ての担い手になるよう支えていく。母親も地域を担う人である。みんなが生きがいを持って輝いて生きていこうとすること、主体性を大事にする支援が必要。

４「専門性 VS.当事者性」という図式から脱却。
　子育て支援センター、子育て広場、ともに地域の子育て支援を担っていく。ともに連携することにより大きな力となっていく。

第 2 分科会　意識改革②親や地域を巻き込む子育て支援　参加申込人数 72 名

『保育園が村のようになれたら　今　和光でこだわっていること　』

―　参加型子ミュニティーのとりくみ　―

講　　師　　鈴木眞廣氏（和光保育園園長・千葉県富津市）

１．　設定された討議の柱、テーマ

意識改革…親や地域を巻き込む子育て支援

保育園が村のようになれたら、今、和光でこだわっていること

参加型子ミュニティーの取り組み

２．　討議の内容

⑴和光保育園の取り組み（小学館「幼児と保育」付録 DVD 視聴）

▼おやじの会のプールづくり　『無理せず、楽しく、がんばらず』

・園庭に穴を掘り（掘った土は築山にする）、木枠とブルーシートでプールづくり

・母親中心の園と保護者のつながりが、父親の出番ができ、園と家族とのつながりへと変化。（母親まかせから、父親の出番ができて定着。）

⑵取り組みのきっかけ（動機）

▼20 数年前、卒業文集の内容が“親が参加した行事〈運動会、発表会など〉の感想やお礼”などがほとんどだった。（普段の園の様子が伝わっていなかった）

・親たちと思いや課題を共有していきたい⇒伝わりやすい園だよりの作成（イラストや読みたくなる遊び心も）

・子どもたちとの生活に“物語”を持っておくことが大切である。

・伝えたいことは言葉におとす。（言葉として書くことで、自分たちの取り組みが文字化できる）⇒何度も伝わりやすさを追求してやっていき、52 ページものガイドブックが出来上がった。

・子育て支援は、『専門家がいて、専門の施設があって』ということではなく、普通の人が専門家のサポートで色々できるようになることに意味がある。少しずつ日常の中で地域との関わりを作り、一緒に子育てをするという関係を築いてきた。

⑶具体的な取り組みとして

①おやじが保育園を乗っ取る日、陶芸窯を使って食器づくり　②母さんの会の活躍（わいがや亭、リサイクルショップ、ベルマーク、文庫のおばちゃんの日など）　③ばあちゃんの出番日（畑の手入れ）　④中学の先生からろうそくについての授業を受ける　⑤障害児グループによる清掃作業日（園も助かるし、グループホーム在宅の人の意欲向上にもつながる）　⑥マタニティ講座（授乳、おむつ変え、寝かしつけなどの実践）

そのほか、『ぼちぼち長屋』『ばあちゃん家』の実践例紹介。

⑷キーワード

＊主役は素人、プロはサポート

＊子縁が異文化をつなげる

＊自分の子どもや家族には、ついついわがままやきついことも言っちゃうけどさ～他人にはやさしくな

れるんだよなぁ

３．　グループ討議、発表内容（グループ別）

鈴木先生から実践の中でのこだわり等の話を聞いて、１０グループに分かれて討議。

・各グループ　　自己紹介なしで
・進行係…みんなにまんべんなく意見を聞く
・記録係…みんなの意見を箇条書きで
・発表…グループの意見発表

（1）『子ども力』『言葉化・文字化』

・和光の素晴らしい実践を知ることができたが、自園に持ち帰りそれを実践するにはどうしたらよいのか
・成功例を聞くことができたが、そこに行きつくまでの過程を知りたい。
・保護者の行事への取り組み（主導をどこまで任せるのか）
・「子ども力」をどのように生かしているのか
・様々な経験を子どもに感じて欲しい。しかし怪我への対応は？
・「言葉化」するための実践方法は？

（2）『はじめの一歩』

・和光のいいところを学んだ中で、自分たちの今やっていることにプラスした方が良いという意見になる。しかし、自分の園で何から始めることができるのか、がポイントではないか。
・和光での『はじめの一歩』がどのような過程でおこなわれたのか。最初の取り組み、きっかけなど、どのように取り組んでいったのか（方法論）を知りたい。

（3）『似た取り組みでもこの違い？！』

・和光のおやじの会の活動と自園での行事で父親に参加してもらった際の違い
　表情が違う。　自園での行事参加時のパパの戸惑い。　和光の取り組みを通して、自園と比べてどうなのか。
・やりたい気持ちをこちらがキャッチする。
・ゆったり感を持ちつつ、言葉に頼り切らないようにする。
・一緒に動いて喜びなどを共に共感し、つながりができるようにする。
・「みんな来ていいよ」の精神をもつ

（4）『保護者主体の取り組みに！』

・おやじの会のようにどうやって保護者を巻き込んでいくか。⇒主体が保育園、支援センターではなく、保護者等になっていくためには？
・保育園施設の貸し出し。
・キャンプをおやじの会主体に。
・園庭にピザ窯を作ってもらう、木を切って椅子にしてもらうなどを保護者に…自園で実践していることの共有が行われた。

（5）『地域の知恵袋の活用を！』

▲地域の方をどのようにして巻き込んでいるのかを発表。

・知恵袋としてボランティアさんに来てもらっている。
・利用者を講師にしたり、保護者に積極的に関わりあってもらう機会を作っている。
・転勤族には地域の遊び場を紹介。
▲今後自園で実践してみたいこと。
・子どもも保護者も一緒に地域の工場で働く姿を見てもらい話しする機会を作る。
・利用者の希望を聞いてみる。
・おばあちゃんたちを取り込み、経験を今のお母さんたちに伝えていきたい。
（6）『具体的な実践に向けて、はじめの一歩』…うちは無理とあきらめていないか？
・何か一つでも取り入れる。（受け身ではなく、発信していく）
・地域に頼ってみよう。
・お金がなくてもできる工夫。（保護者負担もあっていい）（園芸や農業体験もいいのでは）
・親の力を借りる。（上から目線×、上手に引き上げる）⇒子どもが地域をつなぐ
・やりたいことを仲間づくりに（特技をみんなに教えて！！）⇒支援センターに来る親子を巻き込む工夫
（7）『みんなと話し合ってみたいこと』
① 地域とのつながりをどのようにしたらよいか？
② どういうきっかけで、保護者が積極的に協力してくれるのか？
③ 職員の存在や動き…目は届くのか、危険性はないのか？
④ このような取り組みに行政の反応は？
＊どうやって実践していくのか（マタニティ講座、幼保小中高連携）
＊負担に思うと大変だが、楽しいと思えば協力も得られるだろう。
（８）『地域や親子の関わり』
・サロンに来る親子に続けてきてもらうには？
・サロンの内容を変えていくには？
・保育園と支援センターの関わりについて
☆親がしたいこと、やりたいことを考え、来る親子の主体的なプログラム作り⇒親子の自信につながる、ボランティアの活用も
（９）『無理せず、楽しく、がんばらず！！』
・保護者会との連携のとり方　　・取り組みの継続法
・地域の人を巻き込んだ取り組み
・保護者主体の取り組みとなれるためには
＊保育園からの発信、配慮ある関わり、柔軟な対応や考え、アンテナをしっかり張ってきっかけづくりなどが重要
（１０）『みんなと話し合ってみたいこと』
・園とセンターのギャップ〈とらえ方の違い〉
・保護者とスタッフの関わり（ボランティア含む）
・保育園とセンターの保護者のつなぎ方
・地域全体で子育てをサポートするには

＊親子や地域とのつなぎ役となるようにしたい。共通理解も大切になってくる。交流が持てたり、一緒に準備したりする場の提供

４．まとめ（子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての分科会からの提言）
＊利用者を巻き込んでいろいろなことをやっていく⇒そのためには、話題の共有が大切となる。
＊園・支援センターだからと何もかも主になってしまうと、地域の中で“子育てを手伝ってくれる人”や“他人にやさしくなれる人”を見過ごしてしまうことがある。⇒協力してもらうことで、地域の様々な世代の人に子育てに興味や関心を持ってもらう。⇒世代間交流、地域交流が生まれ、子育て文化が育成される。
＊専門家の中にいると、どうしても専門性だけでつながりたがる。⇒さまざまな人と交わり、共に育ちあう関係（環境）作り！
＊リスクはどんなことをしてもついてくるが、どうすればそのリスクを乗り越えるか考え、葛藤しながらやっていくと、必ず出口が見つかる。
＊ついつい専門性で引き取ろうとしがちだが、みんなに甘えながら一緒に考えるようにした方がうまくいく。

第３分科会　意識改革③私たちが持つ子育て支援の総合力を自覚する　参加申込人数 78 名
『挑戦者の苦労と誇りから学ぶ新しい時代の子育て支援』
―　全国の実践事例報告から　―

実践事例発表　数か園
コーディネーター　石川キヨ子氏（みどり保育園・沖縄県那覇市　）
助言者　野池みどり氏（さかえ保育園･千葉県市川市）
発表者　町井理恵（神愛保育園・東京都江東区）
発表者　井上由美子（安良保育園・鹿児島県霧島市）
発表者　宇佐美純代（文政保育園・熊本県八代市）

1　内容

実践発表

・「第二の実家との出会い～支援される側から支援する側になって」　発表者　町井理恵

利用する側から受け入れる側への立場となった。第二の実家と思えるように、若いお母さんたちがいつでも気軽にただいまと言えるような親しみやすい環境をこれからも作っていきたい。

・「保育者の子どもを見る視点」　発表者　菅野由美子

支援センターの財産は一組ひと組の親子である。保育園の財産は子どもの集団があり」子どものペースが大事にされている。その子がその子らしくある時に、一番力を発揮できるということを知っている保護者はその子を信じる事ができる。目の前の子どもの心の動きを想像しながら言葉にする楽しさを母親たちと共有する事が大切である。ゆとりが持てる事により、子どもの見方も変わってくる。保育園と支援センターは業務が違うが、相手が子どもでも大人でも願いを聞きとろうとする気持ちを自分が持って、子ども・親が持っている力がもともとあると信じて辛抱強く待つ。

・「地域の連携で支える」　発表者　井上裕美子

地域に根ざした保育園の保育士が、遊びに訪れた子どもを受け入れると同時に、地域の保健センターとの連携をとり、さまざまな形で支援をしていくことが大切。

・「園児も地域の子もみんな一緒」　発表者　宇佐美純代

子どもが育つ環境に守られ、共に過ごす中で、子育て中の親子にとっても安心できる居場所としてあるのが保育園であり、支援センターである。子育て支援は、保育所で繰り広げられる子育て支援の場面では、子どもも重要な役目をする。ミラーニューロンが働き、子育て親子にも優しく接する事ができる。子どもから子どもに関わる関係も大切。子どもの育ちを支える場として、園児も地域の子どももみんな一緒で、同じ保育者の視線で子どもの育ちを支えていく。

3　講演をとおして明確になった子育て支援拠点事業の課題（制度・人・地域・事業内容など）

保育園との連携、共通理解

保健士との連携

地域との連携

親子一組ひと組との信頼関係

4　講演をとおして得られた新しい方策や具体的なプラン

支援センターの強みは、保育園の中にある事である。保育園ならではの支援を更に深める必要がある。その為には、保育者の子どもと向き合う力、子どもを見る目のゆとり、子どもを見つめる力、相手の気持ちへの感性＝共感する力、ありのままの姿に寄り添う力、子どもの成長を伝える力が重要である。また、保育園の子どもの群れの力、園内の保育士、看護師、栄養士、調理師などが連携する支援、在園児の保育、一時保育などのしっかりと支えるという事が、保育園に子育て支援がある大きな力である。子どもの育ちを支え、そのことで親子の絆が成長していく事を支える。

一組の親子がどのような状態にあるかを見極めて、それに対してどのような支援ができるのかをバトンタッチしていく。それぞれの機関が互いに知り合い、どのようなことをしているのか地域で一組の親子を支えていくことが大切である。

5　子育て支援拠点事業展開のためのキーワード

①共有　②共通理解　③保育園との連携　④安心できる居場所　⑤保育園の中の支援センター
⑥子ども理解　⑦自然体　⑧地域との交流　⑨関係機関の連携　⑩代弁者

6　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての講師からの提言

最初の頃は、「何をやったらいいのか」「どのようなメニューをやったらいいのか」「利用者があるのか」「～をやってあげたい」という視点があり、そこから始まる。担当者の孤立についての課題や親の自立についての課題、相談事業と他の機関との連携の課題がある中で、時間と共に利用者と一緒に育っていった。少しずつ経験を経て、工夫と広がりが出てきたり、一組の親子を支える深まりが出てきたりして現在の姿に至る。

現在の姿とは誇りと自信を持って親子に自然体で接して、支援センターの存在も保育園の中でごく自然であたりまえのようにあることである。支援センターでの強みは、保育園の中にあることで実践発表やグループ討議を通して、保育園との連携や共通理解、地域との交流などが大切であることが明確になった。また、保育士の質の向上が求められ、保育者の懐（子どもと向き合う力、子どもを見る目のゆとりなど）と保育園の懐（子どもの群れの力、保育園内での連携する支援）を使い、保育者の能力を使い、子どもの育ちをしっかりと支えることが保育園に子育て支援がある大きな力である。子どもの育ちを支え、そのことで親子の絆が成長していくことを支える。また、現代育てにくさを感じている子どもを持つ親が多く、その人たちと一緒になって考えるという機会を設けなければならない。自分の中で生きにくさを感じている親とどのように向き合って、生きにくさを共感しながら、前に一歩でも進んでもらいたいという願いを伝える時期でもある。保育者は、そのようなあつかいにくい子ども達の代弁者になり、他の保育者やまわりの子ども達にも伝えていかなければならない。おもしろがったり、手助けする事に積極的になれる母親たちの仲間作りができれば、地域で母親たちが評価されていく。そのような広がりを持った支援センターになっていくことが大切である。

第 4 分科会　意識改革④子どもの育ちを支える子育て支援　参加申込人数 86 名

『子どもの体に異変あり！　子どもが育つ子ども・子育て支援』

―　思春期に花開く子育て　―

パネラー　大和晴行氏（兵庫教育大学准教授）　兵庫県西宮市
井出徹氏　（歯科医師）　東京都中央区
コーディネーター　村上千幸氏（山東保育園園長・熊本県熊本市）
（一社　食育口腔育成支援センター主席研究員）

1　内容

「乳幼児期における動きの課題」大和晴行

体力運動能力が上半身の筋持久力やボール投げ等の身体全体を巧みに使う操作系の動きの低下が著しい。日常生活の何気ない動きがおかしくなっている。例えば姿勢のおかしさが特に気になる。特に４才以降の増加が著しい。また移動系の動きのおかしさの中では、ハイハイしない子が増えてきたように感じる。それから箸が使えない。はさみの握り方や紙をちぎったりすることなどできない子が多くなってきた。さらに、咀嚼系でいつまでも口の中に食べ物を入れて噛まないのめない。また、集中力の無さなども気になる。３才までの体力上位群下位群の差が大きいこと。３才児の体力の差が５才児の体力の差にまで影響している。生活リズムの乱れの中でも排便の習慣に問題があった。（神経系に問題のある子の増加）子どもの動きの中で攻撃的な動きや荷重動作などが減少している。遊びの中で少なくとも子どもの経験する動きの質や量が変化していることが考えられる。

「成人から見た今の子ども達の歯科的な諸問題」井出徹

虫歯の本数は昔と比べると激減しており、歯がとがっている。（食事が欧米化している）、口呼吸の子が多い。あごが小さい。また「うつ」セロトニンが出ない症状。セロトニンを出すためにはおひさまの光をたくさん浴びること、良く歩くこと、呼吸が規則正しくできるか、咀嚼ができるかで多く出る。オキシトシンという物質（愛情ホルモン）に変わる。その愛情ホルモンが出ないなら子どもを抱きしめることは出来ない。体の動かし方が間違っている！年齢に関係なく体調が良ければプラス思考で考えることができる。若ければ若いほど身体は元に戻る。足の裏、腰、背中を見れば子ども達のバランス（身体の）の悪さを発見できる。身体を変えるために絶対に鍛えない、無理強いしない。原因を排除しない限り結果は変わらない。

3　講演をとおして明確になった子育て支援拠点事業の課題（制度・人・地域・事業内容など）

・母親を支援していくことはもちろんだが子どもの発達や子どもの支援は一体だれがするのか？私達が子どもの育ちや発達を支援していくことがこれから大切。

・理学療法士（心ある）を呼んで子ども達の体をみてもらう。連携して子どものうちに、できるだけ小さいうちに良い身体を作る。

・保育士は子ども達（子どもの育ち）を総合的に見ていく専門性が必要である。

・生活環境によってメディアの目線になり、距離感が分からなくなっては、メディアによって生活リズムが狂う。

4　講演をとおして得られた新しい方策や具体的なプラン

・保育所の併設の良さ（臨床）理学療法と連携しながら、私達現場の人間が子どもの育ちを保障できるよう声をあげたり、研修し、私達自身の力をつけていく。

・子どもの育ちをしっかり見極める。

5　子育て支援拠点事業展開のためのキーワード

①子どもの育ち　②スタッフの専門性　③正しい知識を伝える　④体験　⑤不便さの中の育ち

6　子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての講師からの提言

・遊び集団を作ろう！

子どもの動きを生みだす環境、人が必要である。異年齢集団は大切。遊びの世界を拡大していく機会をつくる。

・子ども支援

子ども同士の関係性をどの位作っていくか

・物があふれすぎている。（悪いものは）売らないで！個々の思いやりをしっかり持つ。

・何が原因かわからない状況なのでさまざまな子ども達の取り巻く現状を探っていこう。

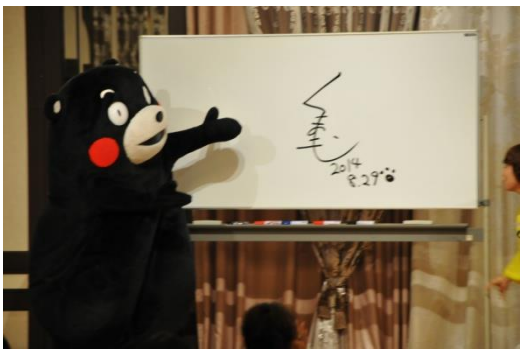
参加者自主企画＊ポスターセッション（メイン会場前ホワイエ）

山　鹿　灯　篭

熊本おもてなし企画＊アトラクション

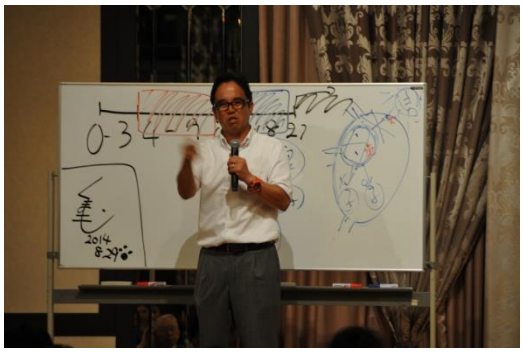
熊本城おもてなし隊

くまもん体操　1



くまモンのサイン

記　念　講　演（13:00~14:30）
「メシが食える大人に育てるために」　～母親だからできること～
高　濱　正　伸　氏　花まる学習会代表（熊本県出身）



【要旨】ニートすら 160 万。引きこもりは恐らく 3～400 万と言われている。教育は大きく失敗している。だから塾をした。

野原や川や、何にもないところで遊ぶ、その為に塾をした様なもの。何もないところから遊びを生み出す力は大事。

頭を良くしたいと思うならば、親の言葉の質が問われている。言葉の質が高いところは頭が求められる。ところが家庭は文化だから気付けない。その家庭がそうであれば疑問を持たずに育ってしまう。

分からない事があれば直ぐ調べる親の子どもは頭がいい。そして聞いた事にちゃんと答える、という事は大事。ずらして答える子がいる。「やったのか？」と聞くと「て言うか、腹減った」。これではダメ、伸びない。『聞いた事にちゃんと答える』という言葉の質はバカにならない。

親が変わらなければ子どもは変わらない、ということを今までずっと言ってきた。例えば 22 歳から自立することを願っているはずなのに、その親が我が子の自立を妨げている要素が今は多い。その中でクレーマーは問題。お母さん、そうすれば子どもは自立できるのですか、と言いたい。ゲームも問題。先々我が子が自立することを目的にしているはずなのに。しかし、母親の前提はこどもを守ること。そしてお母さんは焦る。だから待てない。

０～３歳
４～９歳　赤　幼児期
１０～１８歳　青　思春期
１９～２２歳
2 色でいい、と言っている。「つ」がつくうちは神の子。

育っちゃう、というのが本当だと思う。種があり、それが勝手に伸びていく。それが本当だと思う。

お母さんの失敗とは、幼児が幼児である事にキレいているお母さんが多い。自分が大人であるのに。分かろうとする必要はないと思う。幼児だから。

オスにしなければならないのに、角を折っているのが現実。ぎりぎりのことをやるのが男の矜持。それが分からない。男は三浦雄一郎をすごいと思う。女には理解できない。「すげー」というのがおとこの

矜持、それがプライド。下品な事を言うのが男。それが男。お母さんには理解できない。男は恥をさらした方が勝ち。笑わせた方が勝ち。それをやるのが男の子だ。本音を言わなければ交流は出来ない。オスはオスとして育てなければならないと思う。

9つまでは親を許してくれる、それが神の子。それまでに親にならなければならない。ちょっと叩いたくらいで不良になった子どもはいない。しかし言葉の暴力や無視された、これは痛い。言葉は怖い。消せない。いつまでも心に残る。

言葉は自信にもなるし、自信もなくなる（言葉はマジックである）。とても大きい。言葉は子ども気持ちを開くし、閉じてもいく。

たいがいな事は幼児期で解決できる。しかし、問題は思春期。

特に母娘。娘は子どもが産める体になった、という事。それは脳が変わったという事。切り替わったということ。芋虫から蝶になった、ということ。葉っぱを与えるのではなく、親は飛び方を親は教えなければならない、ということ。

母は曝け出さなければならない。大人になる方法を教えてやらなければならない。例えば恋愛方法を、自分の経験を交えて。今の子どもは。結婚はどうかなと疑っている。だから正直な事を子どもにさらけ出していかねばならない。そうすれば親子（母娘）だけど仲間になっていく。お母さんと娘は。しかし男に本音は言ってはダメ。心がチリジリになっていく。

母親は娘に、例えば背は関係ないよ。背丈や学歴は社会的生活とは全く関係ないよ、と言ってやらなければならない。「信頼」「思いやり」が大事なのよ、とか人生の本当の事を言ってやらなければならない。自分の経験をさらけださなければならない。

おやじは子育ての文化がないから、「おやじの会」とかそういう場所が必要。息子にはおやじが教えなければならない。社会の厳しさを伝える。思春期には師匠が大事。今は、就職の受け入れ先が社会の厳しさを教え、鍛えている状況。

お母さんは基本イライラしている。以前は地域（隣のおじちゃんおばちゃん）が出入りしていた。だから、いろんな人が出入りしていた。だから孤独ではなかった。子育てを独りでやってはいけない、ということだ。

男（夫）と女（妻）は同じ人間ではない、と理解するべき。「犬」（夫）と「虎」（母）位違う、と理解するべき。人権は平等であるが、性差があることを前提とすべき。違う生き物、という感覚が必要。

12歳になったら伝える事があると思っている。１、「自殺するな」　２、「異性を学べ」　と言っている。

社会にでて、相手を幸せに出来なかったら、　アウトじゃん！

今就職さきでは、男女の評価が全然違う。男と女では「このやろう、いつかみてろよ」という理不尽を受け入れる器・経験が今や全然違う。女性はいい。小さい時からいじわる合戦をずーっと続けている。

きれいごとを真に受けてきた男とは全く違う。

　お母さんには「経験を与える為に、塾（保育園）にやっているのではないですか」と伝えている。その事を保護者に伝えるのに（味方にするのに）、テクニックはいる。それが仲間にするテクニック。これは仕事として全社員には徹底させている。

　そして、トラブルは財産ですよ、と言い続けている。

　人間は母親像ですよ。だから母親がニコニコ出来るカードは大事。お母さんにはにこにこ（出来る）カードを聞いて、整理して、教えてあげる。例えば、その中には「自分のお母さん」というカードはいいのではないか。スープの冷めない距離は大事。その距離でお母さんがカウンセラー的存在でいれば、お母さんはにこにこ的存在になりうる。他に仕事をすることもいい。
　１日５分でいいから、我が子を膝に乗せて話を聞と効果がある。寝る前でもいいから。
　無視はいけない。「(親は) 自分の事を忘れていたんですよ」、という思い出は大人になっても忘れない。これは危険。将来バトルになる可能性がある。
　アイドルもいい。例えば嵐はいいようだ。今は時代的な病として閉塞感がある。お母さんは何が好きですか。それを聞き出して、例えば次に会った時「お母さんニノ（二宮・嵐）でてましたね」と言えば、それでそのお母さんとは仲間になれる。

　いじめには入口がある。「やめろ！」といわなければならない。反発しない人は、いじめられやすい。生命力が弱い生き物はいじめられやすい。魚でもそう。アメリカでは早期に発見してソーシャルスキルトレーニングを積ませる。そうすればどうにか出来る。

　勉強が出来る事を鼻にかけているがゆえにいじめる子がいる。「勉強出来るから差別していい」という感覚がある子だった。心配性こそが母の武器。我が子の着るもの、食べるモノに関心があるのが母。それが大切。その子の母親と面談をした時に思った。我が子の過去の成績データを作成するヒマがあれば、我が子のお弁当を作って持たせる事の方がもっと大切でしょうと思った。

　いじめの対応のノウハウ。１、繰り返す２、言いかえる、３、共感する。幼児期はこれでほぼ解決すると思う。
　問題は思春期。いつも通りの家である事が大事。例えば親が学校に文句を言いに行く。これは子どもの世界ではご法度。これをやっては子どもの世界では「チクリ」になる。母親がいつもの通りに対応する事。私にも過去にいじめの経験があった。その時に「あんたが元気ならそれでよかとよ」と母が言ってくれた。これはあんたの外での出来事には口出ししないが、いつでもかえっておいでよ、というメッセージ。母が存在し、にこにこしているから子どもは頑張れる。
　本人が気にしていたら、いじめが呼びだされる。例えば笑いに変えて、ネタにする位の開き直りは必要。（文責：橘）